

平成28年度第2回 逗子市福祉プラン懇話会概要

日時 2017年（平成29年）3月23日（木）

午前10時～

場所 市役所5階 第5会議室

（1）第1回懇話会での課題について

- ・身近さを感じることによって関心は高まる。受身ではなく、身近な問題に取り組む体験や、大学生等から体験談を聞くなどを小・中学校と高校・大学の連携により実践するような工夫が有効ではないか。
- ・助けるほう、助けられるほうの両方の立場を知る上で信頼関係が築かれる。疑似体験などを通して相互理解を深めていくことが大切である。
- ・サポーター数、チーム数というような量的な拡大も必要だが、実際にどういう成果があったか、どういう課題があるのかということを確認にしていくことも大事である。
- ・障がい者の理解を深めるための様々な事業を実りあるものにするためには、障がい者自身が受け身ではなくて発信することが非常に効果的。ぜひ、当事者を中心とした進め方を検討していただきたい。
- ・事業成果の評価には、量的な評価がなじむ項目となじまない項目がある。次につながるためには、どうつなげていくかという、意味のある評価が必要ではないか。
- ・地域包括ケアを進めるためには、フォーマルサービス及びインフォーマルサービスが互いの役割をきちっと果たすことが大事。人を配置する、人を養成するということにも繋がる。
- ・待機児童数は、首都圏で増加しているにもかかわらず、首都圏から遠い地域では利用定員に達してないところもあるというように、地域性による違いがある。また、保育園が増え定数が増加すると、潜在的ニーズが掘り起こされ待機児童が増えるというような、サービスがニーズを掘り起こすという経済の原則がある。保育士の確保や給料など、総合的な対策も必要となる。
- ・待機児童の裏には担い手不足という問題もある。担い手不足は保育にかかわらず福祉分野全般の課題。福祉関係職の厳しさというのは聞こえており、このような視点からの議論もある。
- ・小学校・中学校の段階で、自分の特性はこうだけど、他者の特性がこうだということをどのよ

うに理解していくのが課題になっている。

- ・福祉という教科書はないが、横断的にいろいろなところに福祉という教育がなされているので、そういった視点で先生が見ていただければ、先生側も生徒も福祉への理解が深まるのではないか。
- ・民生委員のほぼ半分以上はお互いさまサポーターとして地域に関わっている。また、民生委員としても包括支援センターや社会福祉協議会と繋がっており情報共有している。
- ・社会福祉協議会が行っている中学校の授業として福祉教育では、先生に対しても福祉教育の話をさせていただいている。先生の理解がないと、生徒の福祉教育は進まない。
- ・お互いさまサポーターは定期的な集会等を通じて、地域の誰が困っていて、そこに何をしなくちゃいけないかということについて話し合っているものの、実践へは足踏み状態で、モチベーションの課題も見えてきている。
- ・日常生活支援総合事業の進捗が遅いという感想は否めない。制度が始まってから担い手側の受け入れ体制が整っていなかったり、また、制度の実施面での様々な線引きに課題が多く、現場としては実働し難い現状であると感じている。

(2) 福祉分野の各個別計画における進捗状況等について

- ・リーディング事業は、行政主導型の事業や、住民が協力あるいは主体的にかかわる事業など様々であり、それをどう評価して次の計画につなげていくかというのが課題になってくる。参加人数ではなく、お互いの理解がどのように進んだかとか、問題をどのように共有化できたか、満足度が上がったか等を評価していく工夫が必要。到達点を評価するものと、そのプロセスを評価するものとの総合的・複合的な手法が必要になってくるので、工夫し検討してみたいと感じた。

以上